

「もとはこちら」のお話し

No. 56

今月のテーマ

忘れていた一生



ある日の勉強会の平井先生

生死は 昼夜覚眠のごとく 一如なり

(平井謙次作 日めくり カレンダーより)

九十八歳の爺さんが、床から離れられないと言え、どんな鈍い人でも、「ああ、老衰か。もうすぐあの世行きだね」と思うだろう。そう、その通り、私はあと二時間もすれば、天国に行けるところまで来ているのだ。

そのせいか、いま私の周りには色々な人達が、まるで、あんころ餅でも並べたかのように座っている。部屋には明るい日差しが差し込み、ガラス戸の向こうには桜の花が咲いている。さくらの木は今を盛りと、やさしい色の花を、町のあちこちで咲かせているらしい。

近頃私は「静」というものを愛するようになった。昔は、じっとしている事をとても苦痛に思ったものだから、これは年をとったという事かもしれない。しかし静を好むとはいっても、どういうわけか、今日のような、本当に落ち着いた静かな気持ちに味わった事は、今までに一度としてなかった様な気がする。

ついこの前まで、いやほんの2、3日前までは、私の周りは今の百倍以上もやかしかったのだ。孫やひ孫が6人もいて、けんかをしたり家の中を走り回ったりして、時には老人の私や私の妻をからかったりして、とにかくそのやかましさと聞いたら・・・。

6人が一緒に喋り、わめきたてるのだから、そのうるさに私の耳は耐え切れなくなってしまうたようだ。それで誰かに、「お耳の具合、悪いのですか」と言われると、私はいつもこの孫たちの事を言ってる事にしていた。そして最後にはいつもこう付け加えるのだ。「いや、私の耳が遠いのは年のせいではない。あの孫たちと一日でも一緒にいてごらんない。あなただって本当に一時間もしないうちに、耳が聞こえなくなりますよ」。

穏やかな死の床

だから、今私がこれ程静かな気持ちでいる事ができるのは、このピーチク、パーチクどもがいつもに似合わず、しょんぼりとして、夫々の母親の膝元で背中を丸めて座っているからだだろう。さして悲しんでいる様にも見えないが、丸い膝小僧を12個も並べてしおらしく座っている姿を見ると、この老人の目にもそれはなかなか可愛らしく映るのだから、不思議なものである。

北原ゆり筆

この孫達に比べ、それらの母親の方はさつきから、「お父さん、お父さん」と、私の事を呼びながら肩を震わせている。

傍に座っている私の年老いた妻が、「これこれ、そんなに泣くもんじゃない。お父さんは仏様になれるのだから、何も悲しむ事はない。喜んで送り出してお上げ」と、これまた震える声で娘たちを諭している。

しかし当の私は、一体どういうわけか、ちっとも悲しくも苦しくもない。しかし泣いている娘たちに、泣くなと言ったところで泣き止むわけでもないだろうから、そのまま泣かせておく事にした。

そつとあたりを見回すと、親戚の者達や近所の老人、婦人達はそれほど悲しそうな顔をしていない。それどころかその老人の顔の色は、まるで熟柿のように赤くつやつやしていて、どうひいき目に見ても、この爺さんが心から悲しんでいるとは思えない。

——と、急に医者かふすまの手前で、「あと一時間くらいです」とつぶやくように皆に知らせた。その瞬間、私はギクリとした。

しかし私以上にギクリとしたのは、周りにいた人達だったらしい。今まで必死でこらえていた妻が、「ウーッ」と泣き出したのをきっかけに、娘達の声が一段と高くなった。

と、それにつられたかの様に私と同年輩の老人、そう、あの熟柿のところから、何かがツツツと畳の上に落ちてきた。

泣いているはずもないのに落ちてきたのは、どうも老人特有の粘り気のない鼻水のような。熟柿は気が付かないのか、それを拭こうとしない。

あの汚いのが畳みの目の中にしみこんでいくだろうと思うと、私は気が気でない。案の定、それはゆっくりゆっくりと畳みの目の中に入ろうとしている。と、また二滴目が、さっきとは少し離れた所に落ちてきた。

深い記憶の底から

気がつくと、いつのまに始まったのか、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と、お経がとなえられている。生きながらにして聞く私の為のお経というのも、なかなか悪くはないものだ。

私の心は、静の中の静というところか。何も思い遺す事はない。私は静かにまぶたを閉じた。

——、いや、閉じようとしたその次の瞬間、私の頬が引きつった。

大変だ！ ああ、大変だ、どうしよう……。私にとって、正にこれは驚天動地。晴天の霹靂。私は、本当に大変な事を、忘れてしまっていた。何という事だろう。どうしてもこのままでは、私は死ねない、いや、死ぬわけには行かない。

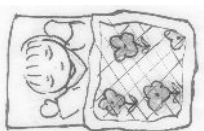
そう思ったせいだろう、さつきまでの穏やかな気持ちは、どこかに吹き飛んでしまい、今にも死んでしまう程に胸が苦しい。鼓動も激しくなってきた。しかし、私のこの異変には誰一人として気がつかず、今も南無阿弥陀仏が続けられている。

ああ、いらだたしい。私は布団から手を出して、髪の毛をかきむしりたかった。勿論むしりとり程の毛があるわけでもないが。それに今では、手の力も抜けてしまっている。あれほどの、力自慢の私だったというのに。

そう、私は今、重大な事を思い出したのだ。それは、私がまだ母親のお腹の中にいた時の事である。

胎内生活

腹の中というのは、どうしてこんなに狭いのだろう。



窮屈で、窮屈で、身動きひとつ自由に出来ない。

私は一人だから、これでもまだマシな方かもしれないが、これもしも双子だったりしたら、それこそ足の指一本、自由に動かす事はできないだろう。私は双子で生まれてくる赤ん坊達に情けを掛けてやった。

うーん、と思いつきり足を伸ばしてみたが、それくらいの事で、この袋の中は拡がりそうにもない。

それにここは、ただ狭いというだけではなく、何の楽しみもない所だ。栄養はへその緒から送り込まれてくるから、私には食事をするという楽しみがない。へその緒とは、便利なものだが、不便なものでもある。何もする事がないのである。

せめて漫画でもあればと思う。

いや、私は腹の中にいた時から、漫画というものがあるという事を、知っていたわけではない。しかしこのせせこましい所から出さずれば、何かそういう面白そうなものがあるだろうと、勝手に推測していただけの事なのだが。

とにかく退屈だ。退屈で、退屈で死にそうだ。

こんなつまらない目に遭うくらいなら、わざわざ生まれて来るんじゃないかったと、私は本気で後悔した。

しかし、今更にただ後悔しても、体が溶けてなくなるわけでもない気がつき、何かもっと楽しく時間を過ごす方法はないものだろうか考えた。そしてこの考え方が私は大いに気に入った。

そこで私は、生まれた後の自分の生き方を決めておく事にした。そうすれば生まれてから、あたふたとする事もなく、計画通りに何の迷いも心配事もなく、予定通りに楽しく生きて行ける事だろう。私は大きく寝返りを打って体の位置を変えた。それまでの退屈や不服の心はいっぺんに飛んでしまっって、私は楽しくてたまらなくなってきた。

しかしここから出られるのは、まだ三ヶ月も先の事。ゆっくりと

時間をかけて、自分が満足できる計画を立てればよい。

時間はたっぷりある。そこで私はひと眠りする事にした。

次に目が覚めてからは、夜も昼もなく、私はこれから始まる自分の人生の事ばかりを考え続けた。折角の人生、素晴らしい計画を立てて、楽しく有意義に過ごさなければいけない。

しっかりと勉強もして、立派な人間になる様に頑張らなければならない、等と、私はがらにもなく真面目に一生懸命考えた。

親にも迷惑を掛けないようにして、便所掃除でも何でも、人の嫌がることも率先してやって、努力をしながら素晴らしい生き方をしよう。そして具体的な仕事のあれこれ等を考え、勇気や希望がわきあがってくるのを快く感じた。素晴らしい世界が私を待っているような気がして、生まれ出るのがとても待ち遠しい。

自分がつい先ほどまで、こんな窮屈な場所で、退屈でつまらない時間を過ごさなければならぬ等と、不服や不満の心を持っていた事などすっかり忘れてしまっって、今となっては一刻も早く外に出て、活躍したいとワクワクしたものだ。

しかしここであわてて飛び出して、未熟児にでもなったりしたら、それこそ大変だ。ここはじっと待つ事にしよう。ゆっくり眠って、時の経つのを待てよう。

私は人生計画を立てるといふ大きな仕事を成し遂げたその満足感と疲れから、それからは一度も目を覚ます事なく、昼も夜も眠り続けた。

生まれ出る苦しみ

.....痛い!!

気がついて一番初めに感じたのが、これだ。



頭がギューギューと締め付けられている。痛くて、痛くて、今にも死にそうだ。折角ここまで頑張って、生きてきたというのに、ここで死んでどうなる。

——あつ、今度は頭の方が、急に寒くなってきた。

それに痛みは、胸の方にうつってきたようだ。

苦しい、痛い。

しかし痛くて苦しいのは、どうも私だけではなかったようだ。

あとで知ったのだが、母親も随分と難産で苦しんだらしい。

何せ私の体は、随分と大きかった、らしいのだ。

しばらくして、新鮮な空気が皮膚全体に触れているのが分かった。

そうだ、今こそ私は新しい世界に第一歩を踏み出したのだ。

そう思ったとたん、私はだらしなく、気を失ってしまっていた。

~~~~~

……、バーン、バーン。

……どこかで音がしている。

しかしモヤモヤしていて、はつきりした事は分からない。

バーンバーンという音に合わせて、私の背中がヒリヒリと痛み出した。

その痛みが段々激しくなってきた、それから急に何か大きな音がした。

そして胸の中で、何かがコトリと音がした。

背中の方はといえば、いままでの百倍以上の痛み。絶体絶命。

正気づいた私は、力いっぱい大きな声で、激しく泣いた。

「オンギヤー、オンギヤー」。

涙が出たかどうかは憶えていないが、まあそんな事はどうでもよい。

とにかくここで泣かなければ、さっきの千倍も強く、背中を叩かれる事になるだろう。

産婆というのは、ものすごい馬鹿力を持っているものだ。私は、

背中を叩く産婆の事を、鬼婆のようだと思ったものだ。千倍もの力で叩かれたりすれば、私は正気づくどころか、きっと死んでしまう

だろう。

それに、その時私は両足を持たれ、逆さ吊りにされていたのだ。

生まれて早々、こんな無様な格好でぶら下げられる事になる等とは思ってはいなかった。

しかし泣いたおかげで自由になった小さな足をバタバタさせて、

私は両手を握り締め、大きな声を張り上げて泣き続けた。

「オンギヤー、オンギヤー」

突然よみがえった記憶

それから九十八年間生きてきたわけだが、今、気が付いてみれば、

あの出産の時の激しい痛みでのせいで、折角立てていたあの人生設計、

そう、これから私が生きていく上での、本当に大切な計画の事を、

きれいなさっぱりと忘れてしまっていたのだ。

確かに今までも物忘れをした事は、数え切れないほどあった。

しかし、これ程のひどい物忘れをした事は、一度もなかったはずだ。

しかもようやく思い出したのが、あと一時間の命と言われている

こんな時とは。

遅すぎる！

いくらなんでも遅すぎる。

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

それにしても出産の時にあれ程の痛みで気を失う様な事がなかった

たならば、私はもつと別の人間になっていたはずだ。

多分今よりも何倍も素晴らしい人間になっていただろう。

それに比べ、今こうして死に行く自分の、この寂しい姿。

ただ単に人生の計画表を腹の中に置き忘れてきた、というだけの

事ではない。

現実の私は、自分の立てた計画とは全く正反対の、本当にどうし



ようもない生き方をしてきたのだ。  
我ながら呆れ果てて、あまりの事に涙も出ない。

~~~~~

生まれてこの方、私は勉強という勉強には見向きもしなかった。
学校という所は、遊ぶ為のところであり、そして宿題というのは、
しないためにあるもの。

友達というのは喧嘩をするための相手。

物は壊すためにある。

そんな状態だから、成績は常に最下位。私の武勇伝は絶える事が
なかった。そして手のつけられない人間として、図体だけは益々大
きくなっていった。

しかしそれでも何とか学校を卒業して就職し、結婚もして、二人
の娘の父親になった。

以来、したい放題の生き方をして、気がついた時は、九十八歳の
爺さんになっていたというわけだ。

年の経つのは早いものだとは言うが、私にとっては早いも遅い
もない。

語る程の人生などは、どこにもない。

何もせぬ間に時は過ぎ去り、今はただ布団の中で死ぬのを待つば
かりだ。あまりの事に、大声上げて泣きたい様な気がする。

生まれ落ちたあの瞬間の、あの時のように。

生きていたい

世間一般からいえば、こうして子供や孫や友人達に見送られ、畳
の上で死んでいけるという事は、一応幸福な事なのだろう。

だがしかし、自分の人生計画を思い出してしまった今となっては、
それはあまりにも情けない人生だったような気がする。

もしも、あの計画通りに生きていたならば、今頃私は立派な仕事

をやり遂げて、仕事を受け継ぐ弟子たちにも見送られ、何一つ思い
遺すこともなく、安心して、心静かに堂々と死んでいける筈だった。

・・・、いや何も私は、今ここにいる妻や子ども、孫達、そ
して近所の友人達に不服を言っているのではない。

それどころかよくよく考えてみれば、この妻は私には過ぎた良
い妻だった。子供達を生み育て、こんな私に愛想も尽かさず、長
い間連れ添って、よく面倒を見てくれたものだ。

世話をかけた妻の事を思うと目頭が熱くなり、胸が痛む。

せめて、「ありがとう」のひと言が言えたらと思うが、今は涙も
声も出せない自分だ。

もっと早く「ありがとう」を言うべきだった。

ああ、もっと生きていたい。

生きて、妻に「ありがとう」と言いたい。

孫達にも、うるさいと叱りつけるのではなく、もっと優しくし
てやりたい。

まだまだ生きて、もっと色々な事を学びたい。生きてさえいれ
ば、そういう事ができるのだ。

生きたい。生きたい。もっと、もっと、生きていたい。

私はぼんやりと天井を見上げた。

そこにはすでに昼間の光はなかった。

ただ、にじんだ蛍光灯の光がぼんやりと目に入った。



その光の中に、赤ん坊の私が現れ、そして九十八年間の人生があ
つという間に駆け巡っていった。

最終場面で現れた光の虹を見ながら、私は大きく息を吸って、そ
して思った。

計画の事は、我ながら呆れる程に、本当にきれいさっぱり忘れて

しまっていた。

呆れはするが、しかしまあ、これはこれで、良い人生だったのかもしれない。

・・・・いや、多分、良い人生だったのだろう。

いや、多分、ではない。

これは、素晴らしい人生だったのだ。

みんな、みんな、本当にありがとう。



・・・・少し疲れた。明日のために、一眠りしておこう。

医者の方が、ぼんやりと空から響いてくるように、私の耳に入ってきた。

「ご臨終です」

(終わり)

~~~~~

## 【あとがき】

以上は、何か小説を書いてこいという宿題のために書いたもので、私十四歳の時の作品です。

もとはもう少し長いものでしたが、今回ご紹介するに当たり、中間あたりを少し省略し、また誤字脱字なども修正しています。

また原文では、老人の年は 83 歳になっていました。当時の男性の平均寿命は 65 ～ 66 歳くらいだったからです。

今、男性の平均寿命は 80 歳くらいになっており、この 50 年の間に 15 歳も延びた事になります。それで、年齢の事は、本当はさほど重要な問題ではないのですが、原文の 83 歳では実感が湧かないために、ここではあえて今の時代にあわせて、延びた 15 歳分を加え、98 歳の老人と書き改めております。

さて、今から思うと何とも荒削りな作品ですが、人生の意味とか、自分とは何なのだろうか、というような事を考えていた当時の事が、懐かしく感じられます。しかし今ならまた、別の角度で書くだろうと思います。

それはその後、平井先生との出会いという、素晴らしい出来事が私を待っていたからです。

先生にお会いして、私のものの見方や考え方が、それまでの何十倍も、何百倍も深まったように思います。

~~~~~

さて、この死に行く老人は、生まれる瞬間の、そのあまりの痛さの為に、自分の人生設計図を、母親のお腹の中に忘れてきてしまいました。

そして生きる目的をすっかり忘れ、刹那的な荒っぽい人生を送ってしまったわけです。

しかし人生の最後になって、我が人生の目的を思い出し、一時は身もだえするような苦しみを味わいます。

しかしそのあと再び、「これはこれで良かったのだ」と自分の人生を肯定的に、素直に受け入れる事ができるようになりました。

そして、次の人生では、「ありがとう」という言葉をもっと言おう、人に対して優しくなろうと思いつきながら、静かに、最後の眠りに付きました。

一日生きれば、一日分の悟りに近づく

さて、死んでからのこの老人ですが、置き忘れてきたその設計図を取りに戻る必要などは、絶対にございません。

何故ならば、彼は生まれて以来、様々な人生体験を通して、意識的、無意識的の別なく、本当に沢山の事を学んできたからです。

この老人に限らず、私達は誰でも生きている限り、様々な事を学び続けております。ですから生まれる以前の自分と、生まれてからの自分とは、一日生きれば一日分、二日生きれば二日分だけ、必ず変化しているのです。

人生の流れの方向は、常に向上浄化の一方通行です。それは、どんな悪人の場合でも同じです。

人間は死ぬ三日前まで変わるものだと言われています。しかしそうではなく、人間は死ぬその瞬間まで変わるものだと、私は思

っています。

それは、この世は諸行無常であり、私達はただのひと時として、ひとつ所にとどまっている事はないからです。ですから息を引き取るその瞬間まで、私達は幸せの方向に向かって行く事ができるので。人生に無駄な時間などは、ありません。

二つの設計図

私達は誰でも、二つの設計図を持っています。

ひとつは、過去から今の瞬間に至るまでの、自分の生き様が描き出していく、自分だけのオリジナルな設計図です。



そこには、その時自分が何を想い、何を言い、現実になしたかという事の一つひとつが、正しく、刻み込まれていっております。

自分では思い出せない事、既に忘れ去った事であっても、ひとつ残らず記入されている筈です。

そしてそこに書き込まれた事がもたになって、それに一番ふさわしい事柄が、私達の人生の上に、現実の形となって次々と現れてきているのです。

私達はそれを、運命・宿命などという形で、日々体験し続けているのです。別の言い方をすれば、今自分が体験する事の原因は、全て自分の過去の中にあるという事です。

ですから、例えばこの老人の様に、頭の中、或いは腹の中だけで、どれ程夢のような素晴らしい未来図を描いたとしても、それを実現する力は弱く、それよりも、もっと強烈な力となって目の前に現れて来るのが、過去から今に至るまでの、自分の生き様であるという事です。

そしてその事は同時に、明日の自分の運命を作り出すのは、今の自分であるという事です。

今、自分が何を想い、何を言い、現実になしているかという事

が、全ての原因となって、明日の自分の人生の中で、運命宿命となって次々と現れて来るのです。

刻々と変わり続けるこの設計図は、過去から今の瞬間に至るまでの、自分が描き続ける設計図で、描いているのは、小我の自分です。

そしてこの小我の自分が作った設計図通りに、私達一人ひとりの人生は、開けていくのです。

ですから、自分の人生の設計者、責任者は自分です。

~~~~~

そしてもう一つの方の設計図。

こちらは全ての人に共通した、同じ設計図です。

ビッグバン以前から未来永劫にわたるまで、決して変わる事のない設計図であり、神の設計図、命の設計図といっても良いかもしれません。

そこにはあの世この世を超越し、有情無情全ての事が記されています。

それは、つながり合った宇宙全てのものを素晴らしく調和させ、絶対の幸せに導いていく設計図であり、私達を丁度良い時に生まれさせ、丁度良い人に出会わせ、生かし、そしてまた丁度良い時に死なせて行く、膨大な大生命の設計図です。

こちらの方の設計者は、大我の自分です。

## 大我と小我が、出会うとき

大我の自分と小我の自分は、決して別々に存在しているわけではありません。

常に常に、大我と小我は離れる事なく、いつも私と俱にいます。

大我の自分と小我の自分が作った二つの設計図。そこに描かれた



二つの道が、いつ交わり合い、いつ重なり合うかは、それはその人次第です。

生まれ変わり死に変わりをしながら、私達は、二つの設計図通りの人生を歩み続けています。

それは自分にとって本当に必要な事ばかりが盛り込まれた、私だけの特別な人生です。ですからこの特別な道を、私以外の人が、私に代わって歩く事は、絶対にできません。

人は、時には本当に不幸な道を歩んでいる様に見える場合もありますが、しかし、それも、その人にとっては、無意識の自分が描き出した、摂理通りの人生なのです。いずれは二つの道が重なる為の、特別に用意された道なのです。

平井先生の場合も、死を覚悟しての断食中でした。  
身も心も苦しみ続け、

「何で自分はこんな苦しい人生を送らなければならないのだろう」と、もがき続けておりました。そしてこんな苦しい人生なら、死んだ方がマシだ、何をしても治らないのなら、いつそきれいに死にたいとの思いで、始められた断食だったのです。

しかし生まれ変わり死に変わりを繰り返し、その機が熟していたからこそ、お寺の釣鐘の音と、目黒絶海老師の問いかけを縁にして、一瞬にして全てを悟る事ができたのです。

また、そののち新たに見つかった病に対しては、治すとか治さないという様な事ではなく、残る人生を徹底的なお詫びの人生に費やしたいと始められた、半断食の生活でした。そして二百十日間にも及ぶ断食の終わる頃、ふと心に浮かんだのが、  
「もとこちら、そのままぜんぶ あたりまえ、ただありがたく すみません」という、言葉だったのです。

その言葉は、私達が決して忘れてはならない、人間としての基本的な心構えを表わすことばでした。

その為にこの言葉は、すぐに NHK の電波に乗り、日本中の人々

に「生きる事の真の意味」を訴え続けることとなったのです。

「もとはこちら」は、自然の法則

「もとはこちら」というのは、「万有引力の法則」や「ピタゴラスの定理」、或いは「アルキメデスの原理」等と同じような、自然の法則をあらわす言葉です。

私達は、【自分が体験する事の、その全ての原因は、全部、自分の中にある】という、もとはこちらの法則を知って、それに即したものの考え方や、生き方をする事が大切です。

そうすれば浄化のスピードがどんどん速くなり、【本来の自分」というものに早く目覚める事ができるようになり、人間本来の最高の幸せというものを獲得する事ができるようになるのです。

それは、条件次第で幸福になったり、不幸になったりする事のない、絶対の幸せです。

具体的なもとはこちらの生き方とは、「今日も一日」のあの言葉で始まる、平井先生の「今日一日の誓いのことば」、十三項目の中にはつきりと書き記されております。

それらの事を、日々淡々と実行実践することで、私達は必ず、「死んでも死なない、宇宙いっぱい自分」と、出会う事ができる様になるのです。「永遠無限の自分」との、出会いです。

#### 【ご案内】

八月の勉強会は、八月六日(土) 午後七時からです。

次回九月は、九月三日(土)を予定しています。

皆様のご参加を、お待ちしております。

勉強会及び月報についてのお問い合わせは、左記まで。

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: [data3@motoha-kochira.com](mailto:data3@motoha-kochira.com)

TEL 073・461・6300